

## 石見銀山につづく山峡の石造アーチ橋（3）

### —匹見町広見の石造アーチ橋—

高橋 悟 岡田 健

#### I. まえがき

島根県内で石見銀山以外に確認されている石造アーチ橋を石見銀山につづく山峡の石造アーチ橋と位置づけ、これまで2つの石造アーチ橋、即ち飯南町頓原の「築立暗渠」、出雲市乙立町「啞谷川暗渠」と呼ばれる石造アーチ橋について検討してきた。今回は3橋目として中国山地の奥深いまさに山峡と言われ、昭和35年ごろから過疎による人口流出が始まり、昭和38年の豪雪に追い打ちをかけられ、昭和45年12月に集団移転による集落消滅に至った益田市匹見町広見地内を通る現在の国道488号線上にある図—1に示す1898（明治31）年建設の匹見町広見の石造アーチ橋（以後「広見石橋」と呼ぶ）について検討を行なおうとした。

そこで、これまでと同じように、石見銀山の石造アーチ橋4橋、そして石見銀山につづく山峡の石造アーチ橋2橋で明らかになった事、日本の明治中・後期及び同時代の島根の状況をふまえて、「広見石橋」と呼ばれる石造アーチ橋の特性、さらには、「広見石橋」を検討する中で生じた疑問点である、なぜ島根県と広島県の県境近い中国山地の山峡の匹見町広見地内に石造アーチ橋が作られたのか、なぜ形式として石造アーチで作られたのか、誰により作られたのか、石造アーチ橋を含む道路建設費及び他の排水施設などはどのように調達されたかなどの点から「広見石橋」を検討してきた。その結果次の事が明らかになった。

1) 広見石橋のある益田・匹見線（豊川—匹見—広見—島根県県境）道路改修工事は荷馬車の通るような幅の広い2.7mの幅員、適切な勾配の道路にして鉄道枕木のような用材である林業資源の益田への集積を容易にするためと同時に広島県と島根県との文化交流を深めるための道路として建設された。

2) 改修道路中の広見石橋のある谷は常時水が流れ、奥が深く、下流には民家もあるなど洪水時には土石流のような災害が想定されることから災害を未然に防止するため腐食に強く、強固な構造の排水を兼ねた道路橋が設計・施工される事が必要と判断され、広見石橋のようなアーチ形式の石の橋が作られた。

3) 広見石橋は加計の佐々木三十郎氏のもと戸河内の石工師により作られた。加計、戸河内は出稼ぎ石垣積石工師の里と知られ、子供時代から石造アーチ橋の事を知り、石工師修行時代にその技を取得していたと思われ、その技を広見石橋架設に用いたものとみられる。

4) 広見石橋を含めた道路改修建設工事費は発注主体が4か村組合事業であった事から4か村にまたがる豊富な山林資源の売却により賄われた。

5) 「アーチ橋もどき桁暗渠」、「桁暗渠」は施工を請け負った佐々木三十郎氏、そのもとで仕事をした石工師が長年の出稼ぎ石垣積みをとうして得た石積みと排水処理の知識、経験を基に地形・水の有無など谷の状況に応じて、広見石橋のような大がかりな排水施設でなく小規模な排水施設として改修道路下に作ったものとみられる。

なお、内容の細部について興味のある方は現在投稿中の「郷土石見」の内容をご期待ください。



上流側



下流側



内部側壁



内部底面

広見石橋外部及び内部状況